

プリメインアンプ グレードアップガイド

今ある
コンポーネントを
徹底活用!

プリメイン中心のシステムを
グレードアップする方法を
とことん解説

1 プリ部を残してパワーアンプを追加
L-590AII + M-600A

駆動力に深みと安定感を!

2p

2 パワー部をデュアルにしたバイアンプ
L-590AII + M-600A

伸びやかな音のための一工夫!

3p

3 パワー部を残してプリアンプを追加
C-600f + L-590AII

プリを独立させる理由を実感!

4p

4 アンプシステムを完全にセパレート化
C-600f + M-600A

アンプを分離する意味とは?

5p

人気の純A級プリメインアンプL-590AIIを
題材に音質の向上を誌上体験!



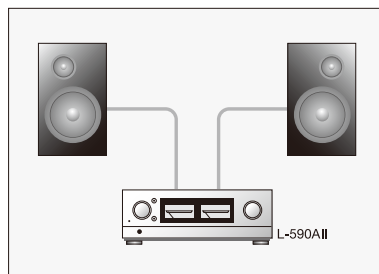
■はじめに

ラックスマンのプリメインアンプL-590AIIは独自の負帰還回路ODNF Ver2.2Aを用いた純A級動作方式の最高峰であるが、そこから先のグレードアップはどうかと考える方も居られるのではないだろうか。さらに上のプリメインアンプを購入すれば良いのか、それともセパレートアンプにすればいいのか…。このランクの製品ともなれば機器選びも慎重になってくる。そこで今回は新たにセパレートアンプのエントリーモデルとして登場した、プリアンプC-600fとパワーアンプM-600Aへのグレードアップを目指し、考えられる様々な組み合わせについて、L-590AIIを軸にして試していこうと思う。

L-590AIIのみの試聴

今回の試聴ではユニバーサルプレーヤーにDU-80、スピーカーにB&W 802Dを用意した。まずはL-590AIIのみを試聴してその実力を確認する。1枚目は『カラヤン/ベルリンフィル:展覧会の絵から「バーバ・ヤガの小屋」～「キエフの大きな門」』(以下、カラヤン)であるが、瞬発力があり、質感も損なわれないオーケストラの再生は余裕すら感じる。録音空間における空気感の表現能力はかなり高いと感じた。続いて『諏訪内晶子/

シベリウス:バイオリンコンチェルト』(以下、諏訪内)では、バイオリンは細めであるが、奥行きとダイナミクス感を非常に広く感じるサウンドだ。深い温もりのある有機的な感触に溢れている。『エミリー・クレア・バーロウ/ライク・ア・ラヴァー』(以下、エミリー)においては、ボーカルがクッキリと立ち上がり、ウッドベースもソリッドな傾向。高域の立ち上がりはクールな印象だ。純A級ならではの澄んだトーンと素直な音色が生きている。



試聴ディスク



ボレロ
スペイン狂詩曲 展覧会の絵
カラヤン/ベルリンフィル
発売元: (ユニバーサル
クラシックス&ジャズ)
POC04-0356



シベリウス&ウォルトン:
ヴァイオリン協奏曲
諏訪内晶子
発売元: (ユニバーサル
クラシックス&ジャズ)
UGGP-7059



ライク・ア・ラヴァー
エミリー・クレア・バーロウ
(B&Wオーディオ・リマスタリング)
VIC-L41386

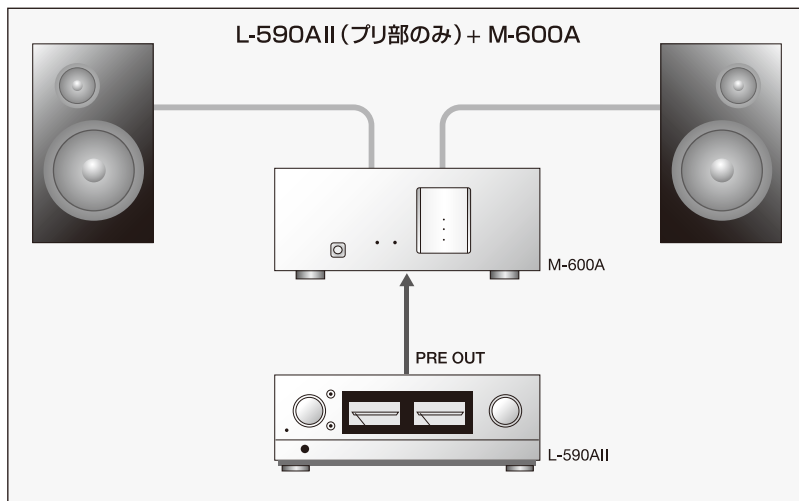
L-590AII+M600A ■プリ部+パワーアンプ

L-590AIIとM-600Aはともに30W+30W(8Ω)という同じ実効出力値スペックを持つ純A級アンプとして数値の上でも、そして価格についてもほぼ同等であるが、プリメインアンプとパワーアンプというポイントで考えると、出力段にかかるコストの対比が変わってくる。セレクトアーやトーンコントロールなどの多彩な機能面を持たないM-600Aは、その分のコストを純粋にコントラクションの強化や、電源部、アンプの回路構成の更なる熟成に用いている。同社独自の負帰還回路ODNFもL-590AIIのVer2.2AからM-600AはVer2.3Aに進化を遂げている。スピーカーの駆動能力も一段深みのある、安定したドライブが可能になるのだ。

L-590AIIのユニークなところはプリ部とパワー部を分割して使用できるという点だ。プリ・パワー間ジャンパーケーブルを外すことで、お互いを独立して使用することができる。今回のステップアップではこの点を大いに活用してセパレート化への歩みを進めてみようと思う。

まず試すのはM-600Aを1台追加して、L-590AIIをプリ部として用いるパターンだ。L-590AIIのプリアウトからM-600Aへ信号を入力させ、スピーカーケーブルもM-600Aに繋ぎかえる。

カラヤンではピアノシモから音の振幅が大きくなっていく過程での階調のグラデーションが細かく、静寂感がより際立っている。ストリングスの微小な爪弾きの粒立ちは、質感がより一層高くなり、弾力感が心地良く感じる。制動力のコントロールも安定度が増す。「バーバ・ヤガの小屋」の冒頭、ティンパニーなどの打楽器が入って音圧が上がる場面でもスムーズに音が立ち上がり、レスポンスの速い特性を実感できる。管楽器系の響きの奥行きも深く、質感の鮮やかさと合わせて、非常に高繊細な空間が目前に展開してゆく。音の瞬発力に関してみれば、電源をそのまま出力段に集約できるセパレートタイプの方が有利に働くのは明白であり、この組み合わせでもその点を感じることができた。



続いてバイオリンとしてはもう一枚別のものとして『宮本笑里/smile:アヴェマリア』（以下、宮本）を聴いてみた。バイオリンとピアノ、そしてオーボエだけで構成される一曲であるが、オンマイクでの楽器を側に感じるサウンドは、指の動きまで見えるかのようなのである。カラヤン同様にレスポンスの良さを実感できるのだが、バイオリンのアタックが鋭く、個々の粒立ちがより鮮明になる。弦の流麗さが際立ち、抑揚感も深く、音場のダイナミクスはかなり拡張している印象である。またSACDならではの有機的な空間表現が効果的に引き出され、ふくよかな音場が広がる。サウンド全体の落ち着きが深くなり、重心の低いピアノの響きは華やかさもあるが、ローエンドまでクリアに伸びている。L-590AIIのみの時と比べ、音場の見通しの良さも改善され、多少混濁感もあった中高域の成分がよりクリアに感じられるようになった。

エミリーではボーカルの太さが増し、トータルで幅を持たせたサウンドとなる。踏ん張りの効いた音場は安定度に溢れ、高域の繊細な表現もそれに追従していくようだ。リバーブのかけ方も綺麗に見通せ、原音に対しての分解力も高く、個々の楽器の輪郭表現が向上。音像は浮き上がってくる。同じくジャズのソースとして名盤『オスカー・ピーターソン・

トリオ/プリーズ・リクエスト:ユー・ルック・グッド・トゥ・ミー』もかけてみたが、1964年という時代を感じさせない、立体的で鮮やかな音場が広がる。ドラムとウッドベースの重心は下がり、制動が良く効いている印象。シンバルの細やかな動きも小気味よく、粒を細かく描写して耳当たりが良い。シンプルな構成だと純A級の上質な品格がより良く伝わってくる。

どのソースでも全体に音場の見通し感が向上、奥行きが一気に深くなった印象だ。スペック数値上は同じ出力とはいえ、数字には表れない音の余裕度というのがセパレートアンプにはある。一つ一つのパーツに対するグレードの違いも大きく、M-600Aではフラグシップ機であるB-1000fの開発で得られたノウハウを注ぎ込んだ、高品位なカスタムパーツを随所に投入しているのだ。プリ部のみとなるL-590AIIにしても、スピーカー駆動の役割をM-600Aに分担してもらっているわけなので、単独使用のときに比べれば電源も含めたトータルの安定度やパフォーマンスは向上する。ともにいえることだが、純A級という、入力信号に対してストレートに、そして繊細に反応する特性の良い増幅回路を持っているアンプであるため、セパレート化した際の微細な違いが、大きな音の変化となって現れる。価格的、スペック的に近い場合でも、一つの役目に特化させたセパレート機はそれだけの深い世界観を持ち合わせているのだ。



試聴ディスク

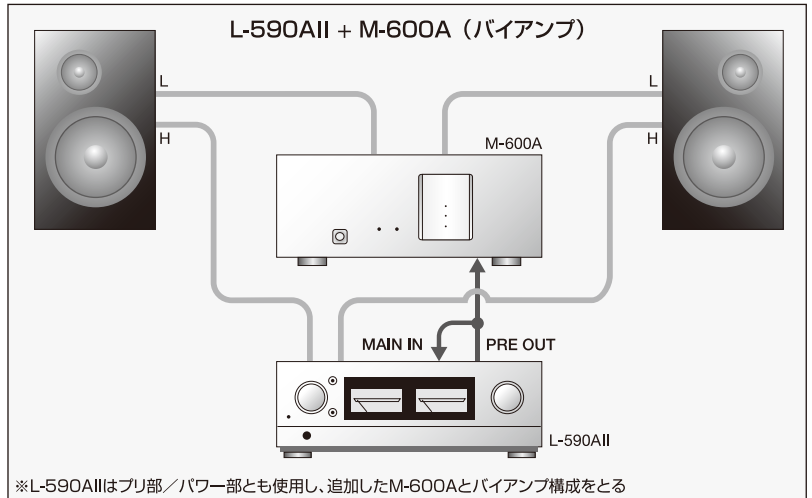
<p>smile スベイン狂詩曲 廣賀金の絵 カサヤタケル/フル 発売元: (ユニバーサル クラシックス&ジャズ) PCC0-0956</p>	<p>smile 宮本 笑里 シロエミリーミュージックジャパン インターナショナル SICC-10052</p>	<p>ライブ・アット・ブルー エミリー・スレーア・パーロウ 1961年録音 VIC-L41386</p>	<p>プリーズ・リクエスト オスカー・ピーターソン・トリオ 発売元: (ユニバーサル クラシックス&ジャズ) UCCL4-9407</p>
---	--	--	---

L-590AII+M600A ■バイアンプ接続

L-590AIIとM-600Aを組み合わせたパターンとして、もう一工夫すると実現ができるパターンがこの項で説明する、バイアンプ接続である。L-590AIIをプリ部として使用すると共に、接続用ジャンパーケーブルの一方を二股にした、特製のバイアンプ・ケーブルを用いることで、L-590AIIパワー部とM-600Aに同じ信号を入力させる。あとはL-590AIIのスピーカアウトを802Dのツイーター側ターミナルと結び、M-600Aのスピーカアウトはウーファー側端子と結ぶ。よりドライブ力の安定度が高いM-600Aで低域をカバーすることにより、各アンプへのパワー配分も最適になる。フル駆動のL-590AIIとM-600Aという、2台の純A級アンプを使った豪華な楽しみ方がどのようなサウンドとなるのか。近い音質の方向性でバイアンプ駆動させるといことは、サウンドの統一性にも結びつき、帯域ごとの齟齬感を生むのを防ぐ。

諏訪内では空間のクリアさがまた一段と増して、奥行きと広がり音場の見通しは格段に向上する。音の前後感がはっきりして、より正確な距離を掴める。リアリティ溢れるオーケストラも豊かにハーモニーとして、空間中で美しく融合する。バイオリンは弦のテンションの加減、線の細やかさも一つ一つ拾い上げてくれる。カラヤンにおいてもその空間性の良さは生きてきており、後半の鐘の音の響きの余韻など、奥行きを深く感じ取れる。ティンパニーの深いアタックも遅れることなく、瞬発力の高さを感じさせるが、質感としても十分重心が下がり、下から突き上げるが如く、である。「キエフの大きな門」のラスト、ドラが鳴り響く場面では音の分離がかなり良くなっており、音の洪水ともいうべき、最高潮なシーンでの解像度の高さは、より感動を大きなものにする。バイアンプによる低域の制動力の向上、そして中高域のヌケの良い、自然な広がりある華やかなサウンドは、純A級ならではの自然で素直な方向性を一回りも二回りも大きくしてくれる。

エミリーにおいては全体にウェットさや艶やかさが加わり、有機的なサウンドとなっている。



ウッドベースは生々しい質感の向上と共に、若干もやっとした曇りがあつた中域成分が減り、音場のクリアさがより良くなる。ボーカルのソフトさも向上しているが、よりワイドレンジな特性感を得た印象で、歌い方も非常に伸

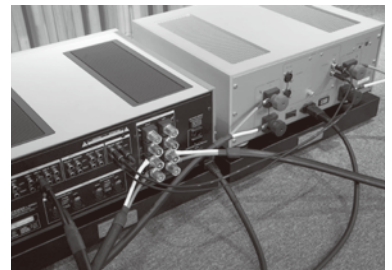


特製のバイアンプ・ケーブル

び伸びとした、圧迫感のない自然なサウンドとなる。サクソでも同様に、太い芯を押し出した、ふくよかなものとなっている。起伏に富んだサウンドは、音楽に込められた感情表現も正確に映し出しているようだ。オスカー・ピーターソンもピアノのアタック音は際立ち、ウッドベースの制動が効いた胴鳴りも生々しい。アタックも弦の指使いがリアルで、描写力も上がっている。

制動力と質感の確かさを見るために、もう一枚ソフトを用意した。この『ステイリー・ダン/トゥー・アゲインスト・ネイチャー：gaslighting abbie』（以下、ステイリー・ダン）は、デジタル録音の境地ともいうべき、

リアルでエッジ感の強い、正確な描写が魅力の一枚となっている。ギター弦の質感やハリのリアリティさが際立ち、キックドラムやスネアのサウンドもタイトな生々しさが引き立っている。中高域の駆動に余裕がないと、このスネアはピーキーさが増し、耳に痛いのだが、この組み合わせではそういったきつきがない。付帯音も一切感じず、静寂感も伴ったリアルな音場を描き出す。嘘をつかないサウンドになると、硬さやきつきといったベクトルが先行するきらいもあるのだが、駆動力が必要なウーファーを別のアンプで鳴らすことによって全体に余裕が生まれ、個々の信号の処理にも、おのずとその差が見えるようになってくるのだ。結果、質感表現が正確でも、音の純度が高く、きつきに繋がる歪み成分が少ないサウンドが実現する。特に、音の伸びやかさというベクトルに対しては、そういった効果の積み重ねが実を結んでいるのだと感じるセッションであった。



バイアンプ配線をしたアンプの後ろ

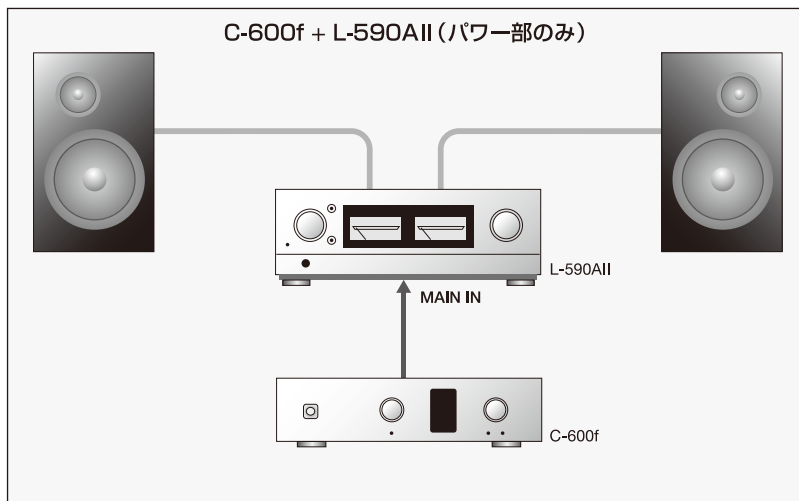
試聴ディスク

<p>ホロ スウェーデン狂詩曲 風箏の糸 カサヤカベのトリプル 発売元：(ユニバーサル クラシックス&ジャズ) POCC-9356</p>	<p>リク・アラワー エミリー・ヴァーローウ (6/27発売)エニターテインメント VICJ-61386</p>	<p>トゥー・アゲインスト・ネイチャー ステイリー・ダン (7/27発売)エニターテインメント WPCR-75175</p>	<p>フリーズ・リクエスト オスカー・ピーターソン・トリオ 発売元：(ユニバーサル クラシックス&ジャズ) UCCU-9407</p>
---	--	--	---

C-600f+L-590AII ■プリアンプ+パワー部

続いては一旦パワーアンプのM-600Aを外し、コントロールアンプC-600fとL-590AIIを組み合わせるパターンでも試聴を行った。統計を取ったわけではないものの、パワーアンプとプリアンプ、そのどちらに重要度を感じるかと問われた時に多くの方はスピーカーを駆動するパワーアンプにその答えを見出すのではなからうか。もちろんプリメインアンプでも、その構成する要素の大半がパワーアンプ段であることから、そういった思いを持たれるのも納得のいく部分でもある。しかしながら、プリメインアンプの概念として、その多くのプリ段は“入力セレクター/ボリューム付きバッファアンプ”という構成であることがほとんどだ。経路がパワー段に近いという、最短ルートで結べるメリットはあるものの、ボリューム一つとっても通常のスタンダード品を用いるなど、プリブロックそのものへコスト的に多くを割けるものではない。

C-600fはコントロールアンプの心臓部といえる音量アッテネーターにODNF回路と一体化したLECUA1000-WMを採用。通常のアンプで用いられている摺動型ボリュームと違い、アッテネーター方式は音量位置による性能変化がほとんどないため、回路を通過する信号の劣化を最小限に抑えられるのだ。そして歪み成分のみをフィードバックさせ、音の立ち上がりの向上と低歪率化、超広帯域再生を実現するODNF回路は、初段トランジスターを4パラレル化、2段目もパラレル化して高S/N比を図った最新のVer2.4を搭載する。さらにC-600f自身が、パワーアンプを最適に動作させるためのドライバーであるという思想を持っており、電源部をより安定した強固なものにしなければならぬ、という発想の元、大容量のコンデンサー/電源トランスを搭載したハイナイヤーシャ電源回路も装備。入力された微小な信号のニュアンスを変えることなく、正確でクリアな伝送を目指しつつ、接続機器との切り替えを行う利便性、さらにはリモコンでの快適な操作性など様々な要素を詰め込んだものがコントロールアンプC-600fなのである。



C-600fの出力をL-590AIIのメイン入力へ接続し、スピーカーの配線も全てL-590AIIに戻し、試聴を行う。L-590AIIもそういった意味では“入力セレクター/ボリューム付きプリ”+パワーアンプという要素を持っているモデルなので、C-600fの力を借りることによって、どのような変化を遂げるのであろうか、興味は尽きないところである。

諏訪内ではバイオリンの描写力、クリアさ、ブレインュアンスの細やかさが際立っている。音の抑揚感も非常に高く、オーケストラ全体の分解能も向上している。収録空間の空気感、奥行きも十分感じられ、ホールトーンは深く豊かなハーモニーに包まれる。休符の暗部の見通しも良く、細かい所作も感じ取れる。カラヤンにおいても、ストリングスの細やかさ、ホーン系の輝き、繊細さは良く引き出されている。その空間の見通しの良さは段違いで、無音部や小音部の静けさについても素晴らしいものがある。金管楽器系の鳴りもストレス感のない、伸び伸びとした響きを堪能でき、天井の高さを実感できるようなサウンドだ。C-600f導入による効果はM-600Aとはまた違ったベクトルの変化であるが、音場表現に関しては確実に、その時と同等以上の音質改善が見られる。ボールが一気に剥れる、という

感覚で、空間の静けさ、クリアさといった点に大きな変化が起こるが、こういったポイントはLECUA1000-WMによる効果が一番高いといえそうである。

オスカー・ピーターソンはピアノが配置されている、センター定位のクリアさが向上し、全体に落ち着きが増す。ドラムやベースの立ち上がりの良さ、質感の更なる向上からクリアに各楽器が浮き上がり、リアリティ溢れるブレイが目前に広がる。非常に滑らかなアナログの温かみを感じつつも、録音の古さを感じさせない鮮やかなものであった。

最後に現代的なロックタイトルの優秀ミックス盤も試聴してみた。『TOTO/TAMBU: I Will Remember, The Road Goes On』(以下、TOTO)は録音やミックスを手がけるエンジニア、エリオット・シャイナーの作り出す、奥行きと広がりを感じ音場の豊かさ、各楽器の配置、音の粒立ち、これらがバランスよく整ったサウンドを聴く。ボーカルの浮き上がり方が抜群で、口元のニュアンスも強調感なくスムーズ。鮮やかだが押し付けがましくないピアノの定位は、自然に音場空間へ広がり、聴きやすい。ベースは深く響くが膨らみすぎず、タムやキックの質感をきちんと描き出す。有機的な音空間で、瑞々しさを感じる。C-600fによってより落ち着きと、空間描写のバランスの良さを得ることができたようだ。



試聴ディスク

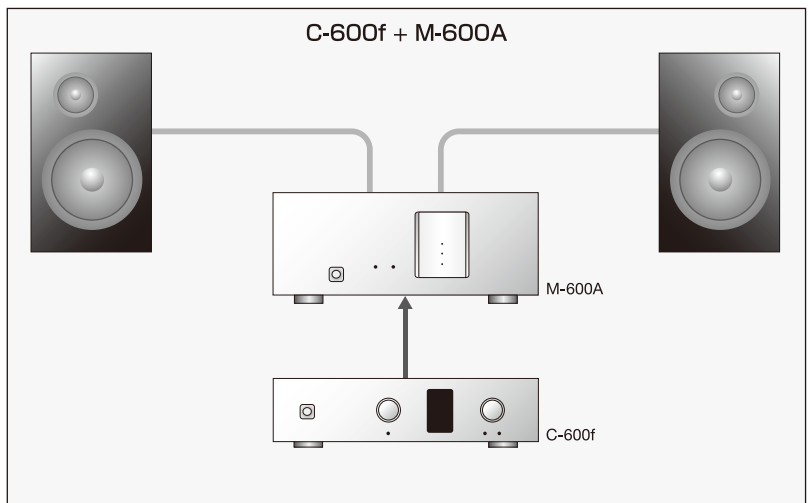


C-600f+M-600A ■セパレートシステム

ここまでL-590AIIからのステップアップというところでいくつかの組み合わせを聴いてきたわけであるが、最後に最終到達点である完全セパレートの世界として、C-600f/M-600Aのペアで試聴を行ってみたい。L-590AIIとM-600Aの入れ替えを行うが、C-600fとの接続ではこれまでと同じアンバランス接続の他、バランス接続にも対応している。設置環境によってはパワーアンプをスピーカーの側に、コントロールアンプを手元に置き、コントロールしやすくしたいといった場合も考えられる。そういった場合にはバランス接続を活用し、ケーブル引き回しの際に混入するノイズの低減に努めたい。

C-600f/M-600Aは筐体によるアースループを発生させない、ループレスシャーシを採用すると共に、グラデーション鋳鉄製インシュレーターレグによってがっちりアンプ本体を支えている。このC-600f/M-600Aはセパレートタイプならではの徹底した筐体構造により、振動も極限まで抑え込むことでパワフルさだけでなく、L-590AIIを始めとするプリメインアンプ以上に一段とクリアで繊細なサウンドを獲得しているのである。

カラヤンでは重心が一気に下がり、オーケストラの迫力が増す。ピアノシモの静寂からフォルテシモのダイナミックな音まで余裕でドライブ。トランペットは突き抜けるように澄んだ高域を聴かせ、ストリングスの細やかさはより密度が増しているようだ。全体の押し出し感強くなり音像も近く感じられるが、鮮明に見通せる音場の雰囲気はリアリティに溢れる。諏訪内においては、バイオリンの深みとプレイニュアンスの強弱、抑揚感もたっぷり表現され、リアルな質感と共に空間への浮き上がりも非常にナチュラルだ。重厚なオーケストラは奥行きも深く、広がりも充分。肉厚で存在感もある各楽器の見通しも良く分解能は高い。大編成のオーケストラも混濁せず細やかなパートが見通せるのは、C-600fの解像度の高さと、M-600Aのダイナミックレンジの広いドライブ力による効果であろう。宮本の天井



に向かって伸びるピアノの高音部は、倍音のリッチさを感じる。オーボエは中高域に厚みがあり、芯のある存在感はふくよかさも残して、有機的な響きを聴かせる。バイオリンも艶やかに瑞々しい弦の響きが魅力的で、その質感は滑らかでハリも良い。色鮮やかな空間が広がり、ふわっと浮かぶ音場が非常に爽やかな雰囲気を描いてくれる。

エミリーにおいてはボーカルの太さと口元のニュアンスの細やかさ、描写力の解像度の高さはリアリティがある。ウッドベースの豊かな胴鳴り、サクソも太さ充分で有機的な響きが全体を支配しているようだ。オスカー・ピーターソンもリッチな空間表現してくれるが、セパレートシステムの明晰な再生音は、シンプルな録音の良さを十二分に引き出してくれる。センターのピアノは綺麗に浮かび上がっているが、甘い中高音の丸みあるトーンも雰囲気を損なわず、きちんと描いている。ウッドベースのサウンドも、アタックのプレイニュアンスを活かしながら、胴鳴りの豊かさも充分鳴らしこむ描写力の確かさを味わえる。弦の動きも力強く、ドラムのキックやスネアのボトム太さと共にサウンドを下支えている。低域の安定度は高く、一種のぬくもりも湛える傾向だ。

一方ポピュラーソースの再生力はどうだろうか。ステイラー・ダンにおいては、細やかなギ

ターフレーズが整理され、粒立ちが良い。ボーカルやコーラスは中域成分が厚くなり、非常に有機的に感じる質感だ。ベースやキックは制動力が効いており、量感も充分であるが、キレの良いタイトさを感じさせ、ロック系のサウンドも平然と再生する。しかしピーキーになりすぎることはなく、スネアの硬さも適正といったところ。TOTOにおいてもボーカルの厚みがより一層増していることを実感できるが、クッキリと浮き上がる音場のクリアさも見事である。押し出し感、量感も申し分なく、タムやベースもソリッドさを持ちながら、伸び伸びと鳴ってくれる。アコギの弦の煌きは倍音成分も豊かで、有機的な印象を持たせてくれる。ピアノやエレキのサウンドも非常に伸びやかで、すっきりと伸びるサウンドは、詰まったストレス感を感じさせない。

セパレートアンプによる余裕のある傾向と、音場の端正な描き方をプリメインアンプで再現させることはなかなか難しい。特にM-600Aの純A級増幅のストレートで素直なサウンドをC-600fがさらに深みと奥行き、一層透き通った音場を与えている。それはジャンルを選ばず、入力されたソースの信号をいかに正確な波形として再現し、増幅するか。純粋にその点を突き詰めていったからこそ実現できた万能なサウンドであることをC-600f/M-600Aの音から実感することができた。



試聴ディスク

 <p>糸井 聖一 スペイン狂詩曲 祝賀会の餘 カラヤン&ベルリンフィル 発売元：(ユニバーサル クラシックス&ジャズ) POCG-9356</p>	 <p>宮本 英史 ヴァイオリン協奏曲 藤原内胤子 発売元：(ユニバーサル クラシックス&ジャズ) UCGP-7009</p>	 <p>宮本 英史 シムニー・ミュージック・ジャズ イン・ザ・シティ 発売元：(ユニバーサル クラシックス&ジャズ) SICG-10052</p>	 <p>宮本 英史 ライオン・アコースティック エリナー・グレン・アコースティック (ビクター・エンターテインメント) VICJ-61386</p>
 <p>宮本 英史 フリーズ・リクエスト オスカー・ピーターソン・トリオ 発売元：(ユニバーサル クラシックス&ジャズ) UCCU-9407</p>	 <p>宮本 英史 トニー・アグイレス・ネイチャー スティーラー・ダン (ワーナー・ミュージック・ジャパン) WPCR75175</p>	 <p>宮本 英史 TOTO (ユニバーサル) SRCS-7818</p>	

まとめ

いつかはセパレートアンプを使ってみたい、と思っておられる方は多いと思う。しかし、L-590AIIのような、プリメインアンプとしてはハイエンドクラスの実力機を所有しておられたら、その先のグレードアップについては悩まれることも充分理解できる。特にL-590AIIのような純A級増幅段を持っている本格仕様であればこそ、どのようなグレードアップができるのか、検討するのもまた面白みのある部分であり、今回のような同価格帯でのセパレートアンプを用いた活用法も、そのうちのひとつとして十分な音質向上が認められるものである。

同価格帯といえどもC-600f/M-600Aはそれぞれの機能性に特化させたスペシャリストであり、L-590AIIと組み合わせることで、それまでのサウンドから2倍にも3倍にも、スケールアップさせることができるのである。個人的にはL-590AIIとM-600Aによるバイアンプ接続の余裕あるサウンドは魅力が高いと感じた。もしもこのようにL-590AIIにグレードアップとしてM-600Aを加えたあと、C-600fのようなコントロールアンプも購入し、完全なセパレート化を図るのであれば、L-590AIIもそのままM-600Aとバイアンプ接続をさせて活用するというスタイルも提案しておきたい。L-590AIIはプリメインアンプであっても、セパレート機にも匹敵するような純A級アンプを持った実力機である。セパレート化を図った後、そのまま寝かせてしまうのはもったいないくらいだ。

同様にラックスマンの歴代プリメインアンプにも、プリ部、パワー部を分離使用できるモデルが数多く存在している(右記、対応表参照)。もしこれらのモデルを所有されている、もしくは現在活用されていないのであれば、是非プリメイン分離使用を検討いただきたいと思う。長い期間所有され、愛着のあるアンプも多いことであろう。一つの有効活用案として、セパレート化を目指すことにより、これまでの不満な点も解消される可能性が残っているのである。

セパレート化が有効であると分かっている、コントロールアンプがどれほど重要か、またパワーアンプの実力はどれほどのものか、そういった気になる点がL-590AIIとC-600f/M-600Aとの組み合わせセッションで、少しでも払拭することができたのではないかなと思う。予算と好きな音質傾向によって、どのセパレート機を組み合わせるのか、今回の試聴記がその選択における指針となりえるようであれば幸いである。

岩井 喬

プリメインアンプ・グレードアップ対応表(主要機種)

下記の表でプリ/パワー分離の欄が「不可」となっている製品以外は、ご使用中のプリメインアンプにリアアンプもしくはパワーアンプを追加することでシステムをグレードアップすることが可能です。

モデル	定価(税別)	発売年	定格出力(8Ω)	プリ/パワー分離	パワー部のゲイン
L-590AII	¥510,000	☆2007	A級30W	ジャンパーケーブル	29.0dB
L-550AII	¥290,000	☆2007	A級20W	ジャンパーピン	29.0dB
L-505u	¥215,000	☆2007	100W	フロントスイッチ	29.0dB
L-509u	¥650,000	☆2006	120W	フロントスイッチ	29.8dB
L-550A	¥280,000	2005	A級20W	ジャンパーピン	29.0dB
L-590A	¥500,000	2005	A級30W	ジャンパーケーブル	29.0dB
L-509fSE	¥550,000	2002	160W	フロントスイッチ	31.1dB
L-505f	¥198,000	2001	100W	ジャンパーピン	29.0dB
L-507f	¥300,000	2001	130W	ジャンパーピン	30.2dB
L-509f	¥410,000	2001	160W	ジャンパーピン	31.1dB
L-505sII	¥195,000	1999	80W	ジャンパーピン	28.1dB
L-507sII	¥280,000	1999	110W	ジャンパーピン	29.4dB
L-509s	¥390,000	1998	160W	ジャンパーピン	31.1dB
L-501s	¥109,000	1998	65W	不可	—
L-503s	¥139,000	1997	100W	不可	—
L-505s	¥180,000	1996	70W	ジャンパーピン	27.5dB
L-507s	¥250,000	1996	100W	ジャンパーピン	29.0dB
L-580	¥380,000	1994	A級50W	不可	—
L-500	¥250,000	1993	50W	不可	—
L-570Z's	¥500,000	1992	A級50W	不可	—
L-570X's	¥380,000	1992	A級50W	不可	—
L-540	¥219,000	1990	100W	不可	—
L-570	¥350,000	1989	A級50W	不可	—
L-560	¥310,000	1988	A級50W	リアスイッチ	42.5dB
L-530X	¥179,000	1984	120W	リアスイッチ	46.3dB
L-550X	¥225,000	1983	A級50W	リアスイッチ	42.5dB
L-510X	¥139,000	1983	100W	リアスイッチ	45.5dB
L-550	¥225,000	1981	A級50W	リアスイッチ	41.1dB
L-530	¥165,000	1981	120W	リアスイッチ	38.4dB
L-510	¥135,000	1981	100W	リアスイッチ	39.2dB

※ 発売年に☆印の付いた製品は2008年6月現在の現行機種です。

生産完了モデルの定価は発売当時のデータです。

※ プリ/パワー分離の欄が「ジャンパーケーブル」と「ジャンパーピン」になっている製品はリアパネルのPRE OUTとMAIN INが外付けのケーブルもしくはピンで接続されており、それをはずすことでプリ部とパワー部を独立して使用することが可能となります。

※ プリ/パワー分離の欄が「フロントスイッチ」と「リアスイッチ」になっている製品はリアパネルのPRE OUTとMAIN INがアンプの内部で接続されており、スイッチを操作することでプリ部とパワー部を独立して使用することが可能となります。

※ プリ/パワー分離の欄が「ジャンパーケーブル」と「ジャンパーピン」になっている製品はリアパネルのPRE OUTを二股に分けるための分岐ケーブルを用意することで、パワーアンプを追加してのバイアンプが可能となります。

※ バイアンプ時はプリメインアンプのパワー部ゲインと追加するパワーアンプのゲインを合わせる事で、スピーカーの低域側と高域側の音量バランスをとることが出来ます。両者のゲインが大きく異なる場合は大きなゲインのアンプ側の入力にアッテネーター(減衰器)を挿入することをおすすめします。

※ 掲載されていないプリメインアンプの対応についてはラックスマン営業部までお問い合わせください。

セパレートアンプを追加してグレードアップ可能なプリメインアンプの現行シリーズ

INTEGRATED AMPLIFIERS

L-505u

手に入れた瞬間から始まる、音楽との新しい関わりあい。洗練を深めたL-505u



SPECIFICATIONS

- 連続実効出力：100W+100W (8Ω) / 140W+140W (4Ω)
- 入力感度 / インピーダンス：PHONO (MM)：2.5mV / 47KΩ、PHONO (MC)：0.3mV / 100Ω、LINE：180mV / 42KΩ
- 全高調波歪率：0.005%以下 (1KHz / 8Ω)、0.03%以下 (20Hz~20KHz / 8Ω)
- S/N比：LINE：105dB以上 ●周波数特性：LINE：20Hz~100KHz (+0、-3.0dB)
- 消費電力：220W (電気用品安全法)、1.3W (スタンバイ時)
- 外形寸法：467 (W) × 179 (H) × 440 (D) mm ●重量：21.0Kg

L-550AII
Pure A

基本性能をさらに磨きあげた、純A級ベーシックモデル (20W+20W)



SPECIFICATIONS

- 連続実効出力：20W+20W (8Ω) / 40W+40W (4Ω)
- 入力感度 / インピーダンス：PHONO (MM)：2.5mV / 47KΩ、PHONO (MC)：0.3mV / 100Ω、LINE：180mV / 42KΩ
- 全高調波歪率：0.006%以下 (1KHz / 8Ω)、0.03%以下 (20Hz~20KHz / 8Ω)
- S/N比：LINE：106dB以上 ●周波数特性：LINE：20Hz~100KHz (+0、-3.0dB)
- 消費電力：190W (電気用品安全法) 190W (無信号時)、1.2W (スタンバイ時)
- 外形寸法：467 (W) × 179 (H) × 437 (D) mm ●重量：22.0Kg

L-590AII
Pure A

密度の高い音楽再生を実現する、純A級モデルをリファイン (30W+30W)



SPECIFICATIONS

- 連続実効出力：30W+30W (8Ω) / 60W+60W (4Ω)
- 入力感度 / インピーダンス：PHONO (MM)：2.5mV / 47KΩ、PHONO (MC)：0.3mV / 100Ω、LINE：180mV / 42KΩ
- 全高調波歪率：0.005%以下 (1KHz / 8Ω)、0.03%以下 (20Hz~20KHz / 8Ω)
- S/N比：LINE：107dB以上 ●周波数特性：LINE：20Hz~100KHz (+0、-3.0dB)
- 消費電力：280W (電気用品安全法)、280W (無信号時)、1.2W (スタンバイ時)
- 外形寸法：467 (W) × 178 (H) × 434 (D) mm ●重量：26.5Kg

L-509u

セパレートアンプ級のクオリティ。ワンボディセパレートの到達点 (120W+120W)



SPECIFICATIONS

- 連続実効出力：120W+120W (8Ω) / 240W+240W (4Ω)
- 入力感度 / インピーダンス：PHONO (MM)：2.5mV / 47KΩ、PHONO (MC)：0.3mV / 100Ω、LINE：193mV / 55KΩ
- 全高調波歪率：0.003%以下 (1KHz / 8Ω)、0.03%以下 (20Hz~20KHz / 8Ω)
- S/N比：LINE：107dB以上 ●周波数特性：LINE：20Hz~100KHz (+0、-3.0dB)
- 消費電力：330W (電気用品安全法)、85W (無信号時)
- 外形寸法：467 (W) × 179 (H) × 428 (D) mm ●重量：27.5Kg

システムのグレードアップに最適なセパレートアンプ600シリーズ

CONTROL AMPLIFIER

C-600f

増幅回路との一体化を実現した、高純度アッテネーターLECUA1000-WM搭載



SPECIFICATIONS

- 入力感度 / 入力インピーダンス：アンバランス / 300mV / 47.5KΩ、バランス / 300mV / 67.0KΩ
- 出力 / 出力インピーダンス：アンバランス / 定格1V / 564Ω 最大5.8V、バランス / 定格1V / 600Ω 最大6.2V
- 全高調波歪率：アンバランス / 0.009% (20Hz~20KHz)、バランス / 0.018% (20Hz~20KHz)
- 周波数特性：20Hz~20KHz (+0、-0.1dB)、5Hz~116KHz (+0、-3.0dB)
- S/N比：アンバランス / 123dB (IHF-A)、バランス / 120dB (IHF-A)
- 消費電力：21W (電気用品安全法)、2.3W (スタンバイ時)
- 外形寸法：440 (W) × 117 (H) × 407 (D) mm ●重量：13.0Kg

STEREO POWER AMPLIFIER

M-600A
Pure A

高音質4パラレル・モジュール採用。純A級30W (8Ω) ~120W (2Ω) までのリニア出力



SPECIFICATIONS

- 連続実効出力：30W+30W (8Ω) / ステレオ時、60W+60W (4Ω) / ステレオ時、120W (8Ω) / モノラル時
- 最大出力：240W+240W (1Ω) / ステレオ時、480W (2Ω) / モノラル時
- 入力感度：550mV / 30W (8Ω) ●入力インピーダンス：アンバランス / 51KΩ、バランス / 67KΩ
- 全高調波歪率：0.009%以下 (1KHz / 8Ω)、0.1%以下 (20Hz~20KHz / 8Ω)
- 周波数特性：20Hz~20KHz (+0、-0.2dB)、DC~130KHz (+0、-3.0dB) ●S/N比：114dB (IHF-A)
- 消費電力：290W (電気用品安全法)、290W (無信号時)、3.8W (スタンバイ時)
- 外形寸法：440 (W) × 189 (H) × 420 (D) mm ●重量：26.5Kg